




REBORN
ART
FESTIVAL
TOUHOKU
OSHIKA
東北 / 牡鹿

Reborn-Art Festival 実行委員会 事務局長
一般社団法人ISHINOMAKI2.0 代表理事
松村 豪太



2011年3月11日





いろんなアイデアを
繋げよう

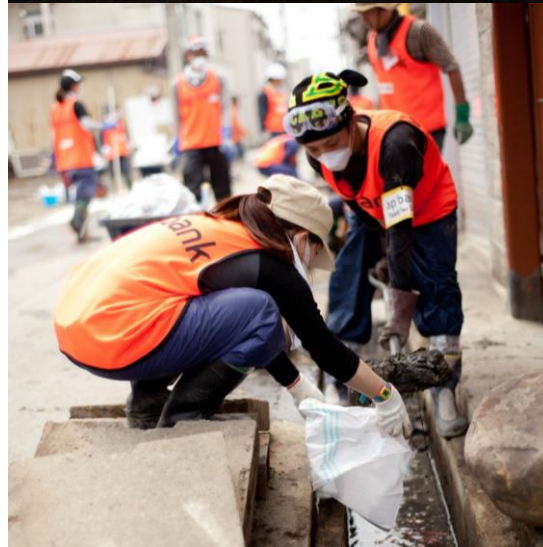
前より
おもしろいまちにし
よう!

商店街を
賑やかしたい

まちになにか
おもしろい仕掛けがしたい

ISHINOMAKI2.0の原点
鍋をつつきながらまちについて語る

ap bank



2015 実行委員会結成

2016 プレイベント

Reborn-Art Festival x ap bank fes 2016

2017 第一回本祭

Reborn-Art Festival 2017

2018 プレイベント

TRANSIT! Reborn-Art 2018

2019 第二回本祭

Reborn-Art Festival 2019

2020 プレイベント

Reborn-Art ONLINE

2021・2022 第三回本祭

Reborn-Art Festival 2021-22

Reborn-Art =人が生きる術

クリエイティブで多様な循環を被災地から創出する

地方と都市の循環

都市の人が東北/牡鹿を訪れることで、牡鹿に活気や経済活動が生まれること、地域の魅力が都市、世界に伝わっていくこと

伝統と新しさの循環

アーティストが東北/牡鹿の魅力を再発見し、新しく伝えていくこと

若者とお年寄りの循環

アーティストや外部から訪れる人がきっかけで、地域の老若男女が一緒協働すること



生命力の循環

未来を自分たちで選んでいこうとする力が
反応しあい新たな価値が生まれること

自然と人間の循環

自然をうやまい、
自然の中で生きていることを
実感すること

被災地と支援者の循環

被災地と支援者の関係でなく、
それぞれのレベルで当事者になること

地域循環共生兼プラットフォーム事業

2019~2020 環境整備

2021 事業化支援



ワクワクする循環を増やす。挑戦できるまち、石巻。

目指す未来

取組



資源



課題





持続可能な食の在り方を考える 「シンポジウム」



シンポジウムのアイデアをアウトプット 「夜市」





フードアドベンチャー



石巻・牡鹿半島の日常的デスティネーション化



学校向けスタディツアー





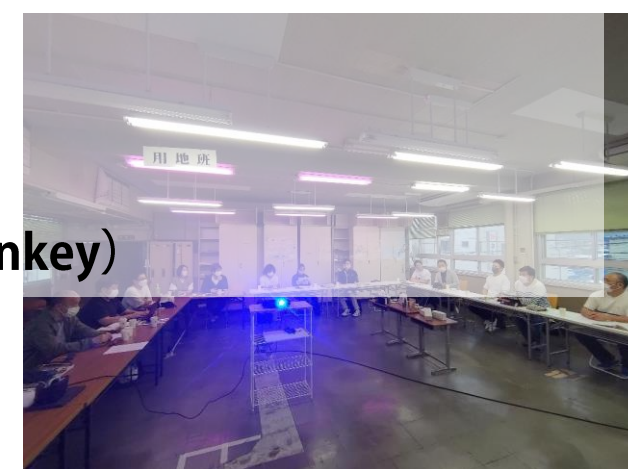
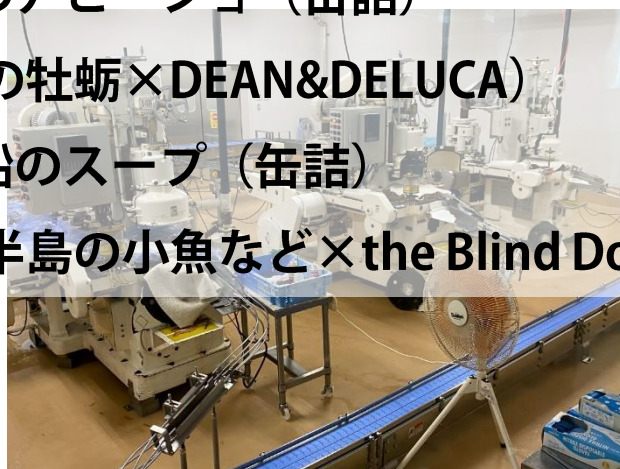
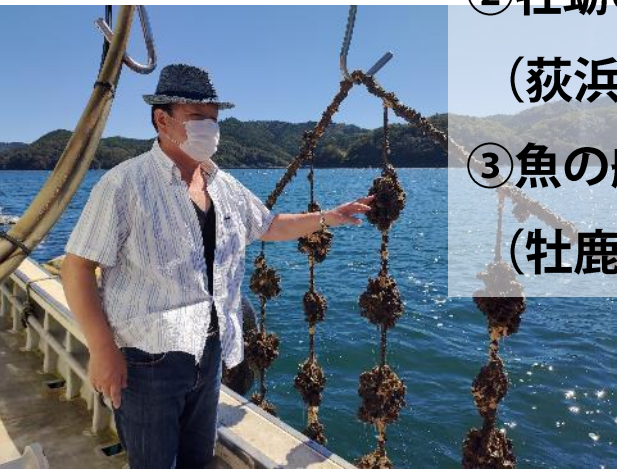
地域の資源を活かした商品開発



① オイルサーディン (レトルト)
(牡鹿半島のコイワシ×ヴィラ・アイーダ×木の屋石巻水産)

② 牡蛎のアヒージョ (缶詰)
(荻浜の牡蛎×DEAN&DELUCA)

③ 魚の船のスープ (缶詰)
(牡鹿半島の小魚など×the Blind Donkey)



今年度の取組を通じて得た気づきや課題

なんだかんだいって

泥臭いマメなコミュニケーションの重要性。

- ・協力加工事業者などステークホルダーとの仲良くなるには時間をかけないといけないし
- ・そして本当に生産する現場のスタッフにやりがいを感じてもらう必要がある

未利用のサカナって
意外と無いんだよ

- ・未利用だと思っている魚介類も肥料や養殖の餌になっている
- ・ムール貝を始め、これまで食用として経済利用されてこなかったことにはそれなりに理由がある

今後の展望



定置網の網の目は細かくて、小さい魚も沢山引っかかりちゃう。でもそうした魚は値段がつかないから海に捨てるんだけど網に引っかかったのをブチブチってちぎって捨てるんですよ。そうした状況何とかならないのかなって。

地元の料理人が中心になり、生産者や外部の食のクリエイターと学び合い、石巻が食の街となるよう行動を起こす。

リボンアート・フードセッションと未利用魚を活用した商品開発

震災当時147人だったのが15人まで減った牡鹿半島桃浦地区。交流人口・関係人口を増やすことで持続可能な賑わいの創出をめざす。

もものうらビレッジを中心としたサステナブルツーリズム

今村正輝さん

震災ボランティアから石巻に移住。仲間と手づくりで四季彩食いまむらを開店。RAF2021-22の前期では地元料理人として食ディレクターを務める。船上で漁を手伝うなど生産者とも交流し、その際に採れたものはフェアな値段で仕入れている。

またこの桃浦にたくさんの明るい声
が戻ってきてほしい。
最初は外の人が訪れてくれればいい
んだ。



甲谷強さん

牡鹿半島桃浦地区の前区長。御年93歳にして現役の漁師。かつて賑わっていた桃浦地区に再び人が訪れ、住みだすことを強く願う。